

第3回 国際政治・外交論文コンテスト

自由民主党 総裁賞

世界の中の日本 —これからの50年—
国際化・アジア化と日本の選択 —歴史が語るこれからの日本—

横田 将久

——序章——

1945年8月15日、日本は欧米列強の前に軍国主義の敗北を認め、平和を希求する民主主義国家として国際社会に復帰する事を誓うものとなった。戦後の日本は“吉田ドクトリン”のもと経済大国の地位にまで昇りついた。他方、数多くの“政治的宿題”を残すこととなった。それは憲法改正であり、歴史認識に係わる問題であり、領土問題であり、そしてアジア主義と国際主義の双方に立脚した理念に基づく国家像の確立である。加えて、我が国には日米同盟を軸とした安全保障における新たな役割模索と脱工業化社会へ向けた数々の経済・行財政改革と難問は山積している。その意味で、これからの50年は国家の生き残りを懸けた50年と言っても過言ではない。

第一章・日本の国家的ジレンマ ——日本的ナショナリズムと一国主義の遺産——
〈国家観の迷走が生んだジレンマ〉

日本が明治期から今日まで抱えている問題として「日本はアジアの国なのか、西欧諸国の一員なのか？」というものがある。福沢諭吉が唱えた“脱亜入欧”は、この問題に対する我が国の姿勢を明確に示したものであった。そして、この問題は日本という国家の姿だけでなく、外交政策に対しても永く影を落とすものとなっている。更に、この不可解な論争は、国家観におけるジレンマとなり、そのジレンマはアジア諸国に対しては武力侵略、欧米列強に対しては軍事的冒険主義という形で勃発した。

日本の国家アイデンティティのユニークさと曖昧さのルーツは明治期に求めることができる。当時の日本は欧米列強の帝国主義による植民地支配の外圧に晒されていたことから、一刻も早い近代工業国家の確立が望まれるものであった。その過程で日本は地政学的にアジアの一員でありながら、飽くまでも(地政学的に言って西欧諸国ではない)西歐的でありながらアジア的でないという独自の国家観を持つに至り、現在までその国家観は受け継がれたものとなっている。また、日本はアジアで最初の近代国家となり、アジアのリーダーを自認するものとなった。つまり、この時期に西欧列強に“追いつけ追い越せ”といった我が国のナショナリズムが確立するものとなり、戦後の日本が辿った経済大国への道も正にこのナショナリズムの平和的追求に他ならないものであった。

1905年の日露戦争の勝利は、日本を自他共に認めるアジアのリーダーに押し上げた。と同時に、この勝利は日本の歴史において悲劇の始まりともなった。それは日露戦勝利が齎した

国家的驕りが結果として最初のアジア地域主義ともいえる“大東亜共栄圏構想”を産み出した。しかも、その手法が帝国主義的かつ単独主義的であったことからアジア諸国に大いなる災厄を齎し、自らは欧米列強に挑み手痛い敗北を喫するという一連の運命を決定付けるものとなった。大東亜共栄圏構想からの手痛い教訓は、戦後のアジア政策にある種のジレンマを齎した。そして、そのジレンマは「アジア的政策を持たないアジア外交政策」を強いるものとなった。

<一国主義の遺産>

戦後日本の国家理念は“一国平和主義”と“一国繁栄主義”である。これらの主義は、他国の物質的ニーズと平和に能動的に関与すること無しに日本自身の平和と繁栄を追及することが近隣諸国の平和と繁栄に繋がるといった極めて受動的な理念だ。

このような一国主義的政策の推進には2つの必然的要因を感得できる。1つには、敗戦の教訓から故意に世界政治の舞台で主要な役割を避けてきたということである。2つには、アジアの中で日本のポジションを明確化することで過去の忌まわしい政策を蘇らせることへの恐れがあったということである。即ち、日本にとっての真のアジア化と国際化というものが未だ明確に定義されない理由をこの点に見て取れるものとなっている。また、一国平和主義は、国家の安全保障をすべて日米安保に託するという姿勢を強め、広義の国際政治や国際的な安全保障問題に関して日本は独自の貢献をしなくてもよい自由を与えられるものとなった。更に、一国繁栄主義は一国平和主義を担保として重商主義的な経済政策を協力に推し進めることとなった。そのことは自由主義的経済秩序からの恩恵を一身に享受する反面、この秩序の拡大に何ら特別な貢献をしてこなかった。

今日の日本は戦後の一国主義的政策が残した呪縛から抜け出そうとしている。内容の是非はともかく、自民党が発表した憲法草案は明らかに一国主義からの離脱を目指したものとなっており、国際的な安全保障における我が国の能動的役割を明確に規定したものとなっている。

第2章・グローバル時代の日本

——アジア主義、国際主義、そして新たな国家理念とは——

> <アジア主義と国際主義との狭間で揺れる日本>

グローバル化は国家間の相互依存を強める一方で、EUやNAFTA、APECといったリージョナリズム(地域主義)を促進するものとなっている。このような国際情勢下において国家は国際化を追及すると同時に地域に根ざした政策のあり方をも模索しなければならないものとなる。そのことから、日本はアジア地域主義・アジア化(Asianization)と国際主義・国際化(Internationalization)の双方を充たす政策理念を確立しなければならない。

かつて日本は、アジア化を日本化(Japanization)と、国際化を西歐化(Westernization)と捉えていた。歴史において、このアジア化と国際化は、諸刃の剣であった。それは西歐主義的価値観に対抗する形でのアジア主義的価値観としての発露であり、日本を帝国主義的政策に突き進ませる動機となった。他方、日本の国際化或いは国際的ナショナリズムは、欧米列強国のパワーとテクノロジーへの劣等感に対するアンチテーゼとして、またアジアにおける日本の覇権主義確立への渴望によって鼓舞された。

戦後のアジア化と国際化は全く異なるコンテキストで進められてきた。1960年代初頭の貿

易自由化や1970年代の資本の自由化は、外圧による国際化の好例である。一方、戦後のアジア化は帝国主義的武力侵略への厳しい反省から経済分野に特化した幾分跛行的な日本の戦後解釈に基づくアジア化を進めた。それはアジア諸国と経済的な協力体制を推し進め、この領域における経済的イニシアチブを握ってアジア全体の繁栄をリードするというものであった。要するに、国際化は“外圧”によって、アジア化は戦争に対する自らの厳しい反省という“内圧”によって齎された。この事は、アジア化と国際化を国家理念の中で大きく乖離させることはあっても相互補完性を見出すものとはならなかった。

以上の歴史的事実を踏まえると、グローバル時代の日本が採るべき道が見えてくる。つまり、アジア主義と国際主義との理念の上に国家像と国益を如何に定義し具現化するかということである。では双方の主義を結び付ける基本的概念は何か？それはやはり他国と共有し得る“価値観の創出”と“相互扶助への努力”というものになろう。

一国主義は言わば、“日本中心主義”であり、アジア主義にも国際主義にも立脚したものではない。それ故、一国主義的理念からの脱却は急務だ。他方、双方の主義に立脚した理念は、日本と他の諸国が共存共栄できるような国際・地域秩序の構築を要求するものとなる。今日、積極的に推進されているFTA構想は、一国繁栄主義からの脱却を明確に示したものであると同時に、日本のアジア化・国際化を推し進める原動力となろう。

更には言え、地域的役割と国際舞台で果たす役割とを相互に関連させる国家意識を国家観の中心に据えることが重要だ。具体的な方策としては次のことが考えられる。

(1) 地域的役割への模索

我が国は引き続き自国の経済力を政治や地域安全保障目的に利用すべきである。その中心はODA政策である。何故なら日本の経済援助が現在でも全国際援助の大半を占めている事実は無視し得ない政策的パワーがあるものと考えられるからである。政府はアジア地域における多角的な安全保障体制の確立を長期目標に据え、ODA政策により一層厳密な政治条件を課す形で政治手段として利用すべきである。国家財政が厳しくなるにつれ、ODA支出も削減されていくことになると考えられることから、今後のODA政策は量よりも質を重視したものにするべきであろう。そして、その質には地域益と国益とのリンケージを明確に規定した政策的側面を盛り込むべきである。

(2) 世界に貢献できる国へ

国連改革は日本の国際貢献の拡大を図る上において欠くことのできない政策である。即ち国連改革を通して未だ戦勝国のロジックで運営されている国連を変えていくことが日本の国際的役割の正当化と信頼性の向上へと繋がるものだからである。他方、憲法改正は日本のノーマライゼーションに係わる政策として強力に推進すべき改革である。解釈改憲の政治手法が憲法と矛盾する政治を放任していることは明らかな事実である。それ故、日本でしか通用しない不可思議な解釈を必要としない憲法の制定とそれを忠実に守る国家像を提示してこそ貢献できる国家への第一歩となろう。言い換えれば、憲法改正は憲法のグローバルスタンダード化に他ならない。また、憲法を改正することと、その憲法下で行使する政策とは全く別問題である。少なくとも国際平和活動等への参加をスムーズに行えるような法的環境を整備することは冷戦後の日

本が追うべき責務と考えられる。

——終章——

日本は明治期の近代国家の確立から第2次世界大戦での敗北で1つの歴史を閉じた。更に戦後の民主主義国家としての出発から55年体制に終焉を告げることで第2の歴史の幕を引くこととなった。そして、現在歴史の第3幕において、日本はグローバル化と冷戦後の新たな世界秩序構築に貢献する一員としての国家観の確立とその為の選択をしていかなければならない。それ故、これをどのように具現化していくかが即ち日本が目指すべき道となる。そして、その答えは日本が辿ってきた過去の歴史の中にある。19世紀の英国文学者・サミュエル・バトラーは「未来に思いを馳せる者は誰しも現在と過去とを無視することはできない。何故なら我々が本当の過去と本当の現在についての認識が不足しているからにほかならないからである。」と言っている。国家をそれを構成する個々人の意志の総体として捉えるのであれば、国家がその未来に思いを馳せる時、現在と過去とにその未来の姿を見出そうとするのは当然の帰結と言えるのではなからうか。